

三英傑と遷宮



日本人に人気の武将—織田信長・豊臣秀吉・徳川家康。

この三人が、遷宮に尽力したことをご存知だろうか。

“天下布武”をうちたて、戦国の世の統一を目指した信長。

比叡山焼き討ちや一向一揆の鎮圧など、残忍な行為が取り立てられることが多い。

しかし、神宮に関しては違った。

天正13(1585)年10月の両宮正遷宮が永き中絶期間を経て再興されたことについては、まず信長の神忠をあげなければならない。

家臣^{おおたぎゅういち}の太田牛一が記した『信長公記』^{しんちやうこうき}には、遷宮復興に関する記述がある。



(織田信長黒印状)

天正10(1582)年、御師上部貞永の一千貫の援助の願いに対し、信長は「民百姓等に悩を懸けさせられ候ては、入れざるの旨、御諒なされ、先づ、三千貫仰せつけられ」とあるように、庶民に迷惑をかけさせてはいけない、と言ってとりあえず三千貫寄進するよう命じた。千貫は今の一億から一億五千万円ほどである。

同じように『外宮天正遷宮記』にも、神宮より信長に対して、正遷宮の実施を注進してその承認を得、内宮・外宮にそれぞれ千五百貫、合計三千貫を寄進していることが記録されている。

また、興味深いのは、『信長公記』翌日の記述である。「濃州岐阜御土蔵に、先年、鳥目一万六千貫入れおかれ候。(中略)正遷宮入りし次第御渡しなられ候へと御諒なり。」つまり、岐阜城の土蔵に先年、錢一万六千貫を入れておいたから、遷宮に必要なという申し出があれば渡してやるように、という指示を出したのだという。

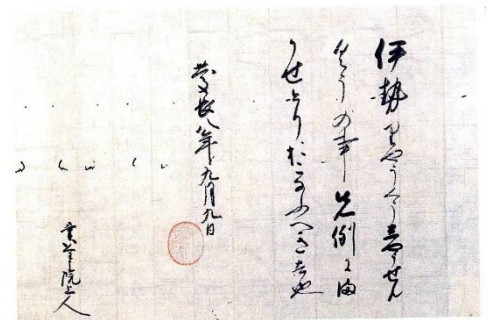


しかし、この年の6月信長は、本能寺で最期を遂げることになる。そしてその遺志を継いだのが秀吉である。

秀吉は両宮の遷宮について積極的姿勢を示し、天正12年金子五百枚と米千石とを神宮に奉獻し、ついに翌年の天正13年、第41回の式年遷宮が両宮で行われた。

また、秀吉が日本全国で行った検地においては、宮川以東の地は大神宮御敷地としてこれを免除し、多気郡四ヶ村、度会郡四ヶ村及び有爾の神領を寄進したことは、秀吉の神宮崇敬心が最も明らかに現われたものであろう。

そして家康。家康は慶長8(1603)年に遷宮朱印状を慶光院周養に与え、米三万石を寄進している。江戸時代の遷宮において徳川氏は、三万石におよぶ造営費、造営奉行と近隣諸藩の連携、御造営用材の安定供給につとめた。殿舎や祭儀など制度も充実し、衰微と退転のうち続いた中世とは比べようもない盛時を迎えることになるのである。



(徳川家康朱印状)

- 大神宮史要 (大西源一/著 平凡社 L174/オ)
- 神宮遷宮記 第四卷 (神宮司庁/編纂 表現社 L174/ジ/4)
- 神道史研究 第二十卷 第五・六号 (神道史学会/編 神道史学会 L174/シ)